

number of lines is 16

い森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

またそのなかでいつしよになったたくさんのひとたち、ファゼーロとロザーロ、羊飼のミローや、顔の赤いこどもたち、地主のテネモ、山猫博士のボーガント・デストゥパーゴなど、いまこの暗い大きな石の建物のなかで考えていると、みんなむかし風のなつかしい青い幻燈のように思われます。では、わたくしはいつかの小さなみだしをつけたながら、しずかにあの年のイーハトーヴォの五月から十月までを書きつけましょう。

これはTESTデータです。このように振り仮名を振ったり、圈点を振ることもできます。

1 吾輩は猫である

I  
吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか、と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いてた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じが、あつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのが、いわゆる人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思つた感じが、今でも残っている。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫にもだいぶ逢つたが、こんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず、顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。どうも咽せぼくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知つた。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておつたが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思つて、とどろきと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているが、あとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

17mm

10mm

17mm

14mm

a6  
(文庫) 版縦1段組

39  
字  
16  
行  
12  
Q  
20  
H

3

17mm

10mm

17mm

14mm

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおった兄弟が二疋も見えぬ。肝心の母  
親さえ姿を隠してしまった。その上今までの所とは違って無暗に明るい。眼を明いてい  
られぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛  
い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。